

全校修養会で『平和』を学ぶ

遺愛では11月8~9日の2日間、東京から四竈 揚(しかま よう)先生をお招きし、『平和』というテーマで全校修養会を開きました。遺愛の修養会は今年で59回目になります。

講師の四竈先生は、広島県の旧制修道中学2年(14歳)の時に被爆された牧師先生です。当時一度は先生の御家族6人全員の無事を確認できたのですが、2ヶ月後に2歳上の姉の佑子さんが敗血症のために亡くなります。四竈先生はその朝働いていた作業所から、教員の指示で、来ていなかったクラスメイトを学校に迎えに行った矢先に被爆しました。爆心地に近い作業所で働いていた200人以上の生徒達は全員亡くなりました。また、学校も原爆のために崩れ、窓ガラスの破片が全身に刺さった生徒、崩れた天井や壁の下敷きになった生徒が目の前で亡くなるという経験をしました。その経験からなぜ自分が生き残り、今なお生かされているのか、その意味を深く問い、信仰の道に入ったのだそうです。

私達、現代人は自分の快適さを追い求め、「自分さえよければいい」という自己中心の思いに囚われる。それが高じると「邪魔者はいなくなった方がいい」と考えるようになる。それが、戦争を生み出すのだと先生は語ります。国連ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とありますが、その意味を深く考えさせられた修養会となりました。

2日目の放課後には生徒対象の「講師を囲む会」がありましたが、50人以上の生徒が自主的に参加し、四竈先生に熱心に質問をしていました。



2011年11月10日